

審査の結果の要旨

氏名 金 侖貞

本論文は、在日韓国・朝鮮人が日本社会における差別・抑圧の社会構造のもとで被差別の当事者として民族的なアイデンティティを形成し、住民・行政と対話を重ねつつ共生の教育理念を追求してきた過程を中心に、社会教育における「多文化共生教育」の理念形成とその土台となる実践的な展開を川崎市の事例にそくして考察した実証的な研究である。

京浜工業地帯のなかにある川崎市桜本地区は戦前から朝鮮人集落が形成され、現在三千人の在日韓国・朝鮮人が居住している。本論文は、被差別者である在日・韓国朝鮮人の潜在的な不満や葛藤から発展してきた社会的な運動過程を対象とし、ミクロなアプローチによるフィールド調査と豊富な第一次資料によって韓国・朝鮮人の存在形態とその意識的葛藤関係を解明するとともに、その要求が市当局、教育委員会に受け止められ、先駆的な「外国人教育指針」が確立され、さらに日本で唯一、在日韓国・朝鮮人が館長である公立社会教育施設「ふれあい館」が設立される過程を日本の現実にねざした「多文化共生教育」の成立として意義づけ、日本および韓国の社会教育にとっての可能性を考察している。

本論文は9章によって構成されている。序章では「国民」教育の限界を超える「多文化共生教育」の展開におけるエスニックマイノリティとしての在日韓国・朝鮮人の課題を提示する。1章では川崎市桜本地区の地域史をたどり、生活の貧困と青少年問題に凝集された地域課題を浮き彫りにする。2章では、1970年代の民族差別撤廃運動・民族教育実践の先駆けとなる日立製作所の就職差別反対運動から、民族としてのアイデンティティ形成が意識化される過程が明らかにされる。3章では「川崎市在日外国人教育方針」作成、「ふれあい館」設立にむけた市教育委員会との協働の構築過程が分析され、4章ではふれあい館の多文化共生教育の実践的展開と地域における「協働」の発展が考察される。終章では、在日韓国・朝鮮人のアイデンティティをめぐる葛藤の構造と歴史的超克をふまえながら、教育理念としての「共生」理念の生成へのパラダイムを提示している。

社会教育分野の多文化教育研究は外国人ニューカマーの識字教育に焦点をあて、あるいは自治体教育行政の外国人社会教育事業を中心に分析したものが多く、本研究は在日韓国・朝鮮人によって設立された社会福祉法人「青丘社」の活動にそくして質的調査を積み重ね、在日韓国・朝鮮人の2世から4世にわたるアイデンティティ形成の変容をとらえ、多文化教育実践の展開過程にふみこんだ研究をおこなっている点で、従来の研究の水準を超えるものとなっている。全国的視野、あるいは国際的な多文化教育の生成における位置づけなど今後の課題を残しているが、豊富な資料にもとづく実証的考察から「多文化共生教育」の理念の誕生と具体的な形成過程を解明しており、博士（教育学）を授与するにふさわしい論文と評価された。